

## 教区における社会的紀律化空間 —— 教区査察による公的生活圏の創出 ——

増 井 三 夫\*

(平成5年10月29日受理)

### 要 旨

本研究はプロイセン農村社会における紀律化過程研究でもっともたち遅れている「精神＝倫理面及び心理面での構造変化」を考察した試論である。考察の軸は、1) 村落に監督区定期査察制度が導入されたことによって村落生活に如何なる変化が生じたか、2) 公説教→公教理問答試験がとくに私領主から国王への権威観の転換（支配－服従関係の転換）を如何なる論理で図ろうとしたか、にすえられた。考察の結果、1') 査察によって村落社会の私的生活圏から公的生活圏が、おぼろげながら一つのイメージをもって、教区世論のなかに姿を現してきた、2') 聖権威への畏敬と無条件の心服を徹底することによって権威への無自覚な服従を容易にする仕組が公説教→公教理問答試験で抽出された、という2点をとりまとめることができた。

### KEY WORDS

Sozialdisziplinierung 社会的紀律化 Kirch-und Schulvisitation 教会・学校査察

### は じ め に

18世紀のプロイセン社会生活を絶対主義国家が「完全に紀律化」する（村上淳一）過程は、とくにその実証について「近代的軍隊と規律化」および敬虔主義運動の分野で優れた成果が上梓されているが<sup>(1)</sup>、肝心の「精神＝倫理面及び心理面での構造変化」（エーストライト）を説明する「教育過程」にまで考察が十分におよんでいないために、いまだ「完全」とはいえないのである。そもそも社会的紀律化が国家制度の「整序化」ではなく、「公的生活の規律と秩序とを全般的に整序化する」（エーストライト）のであるから、まず18世紀プロイセン社会生活が如何にして紀律化の「公的生活」に組織され、意識の形態においても「整序化」されたかが問われる必要であろう。本小論は村落社会においてこの「公的生活」が如何にして村民に意識され、その意識がどのように「整序化」されたかについて試論的な考察を企てたものである。

### I. 教区における社会的紀律化の目的

〔1〕 村落学校を軸とした教区の教化システムは青少年と未婚者に如何なる社会的行動様式

---

\* 教育基礎講座

へ紀律化せんとしたのか。教区の社会的紀律化は監督区の査察によって監督される。社会的紀律化の目標は、したがって、まず最初に（就学規程以前に）査察の実施要項である査察規程で定められている。それが1710年の『一般査察勅令』（Edikt wegen der General= Visitation derer Kirchen, Schulen und Hospitalien und dabey zu beobachtenden Fragen）<sup>(2)</sup>とその実施令である1715年の『訓令』<sup>(3)</sup>である。『一般査察勅令』は、①「主の御言葉と御命令に基づく真の礼拝」、②「敬神」、③「自己の義務を誠実に果たすこと」を査察の最大の目的と定めているが（前文）、それは、領主→領民関係（下図の1）を最高司教→教区民関係（下図の2）に転換し（No. II）、上記3点の《神への無条件の心服・畏敬・忠実》を教区民の紀律として制度化（内面化）する（下図《》）という仕組みになっている。ここで注目されるべきは、第1に私領主所領区域が教区、領民が教区民へ転換されていることである。これは非常に巧みな戦略であったという

教区民  $2 \leftrightarrow$  国王

$\searrow \quad \nearrow$   
 $3 \quad 3$   
 $\nearrow \quad \searrow$   
 $3 \quad 3$

領民  $1 \leftrightarrow$  領主

ことができる。すなわち、この転換によって絶対王政は私領主所領区域にその監督＝査察を導入する正当な根拠をえることになったのである。第2には、領主所領区域＝教区への査察制度は、領主にたいする農民の人格的隷屬意識を、教会と学校によって、《神への無条件の心服・畏敬・忠実》の意識へ転換し（上図↑<sub>3</sub>）、そのことによってヘルを《領主→神→ラデスヘル》へと置換するという意味での農民意識変革（この

変革についてはすでに別に1790年のザクセンブルスニッツ地方における農民蜂起の歌謡、パンフレット、檄、回覧から考察した<sup>(4)</sup>）に途を拓いた。この変革が社会的紀律化の一方の軸（他の軸は軍隊のような厳格な軍紀といった制度による変革）となったのである。

1715年の『訓令』はこの前者の紀律化の実践要項を定めたものである。1710年『一般査察勅令』では査察項目にシュールマイスターが「レーゼン」（読むこと）「シュライベン」（書くこと）「教理問答書」を「教授しているか」があげられていたが、『訓令』は査察の最も重要な戦略が公教理問答試験の実施にあることを明記している。すなわち、教会における全会衆（＝全教区民）を前にした公教理問答試験における査察官の審問および監督は、公教理問答教授が①正しく理解され習得されているか、②信仰の適切な強化になっているか、③生活の改善に役だっているか、④教区民が信仰生活と私生活とにおいて「全能の神と国王陛下にたいする責務」を果たしているか、にまで及んでいたのである。このように、1710、1715年の査察規程が公教理問答試験とそれによる信仰生活と私生活の監督——農民の私生活圏に「全能の神と国王陛下」にたいする、その意味で「公」的な「義務」圏が査察の管轄圏として持ち込まれたことにつとめて留意——を制度化することを企図したものであったことにわれわれは注目する必要がある。この点を考慮にいれると、1717年以降の学校・教会規程で教理問答教授およびその補習教授が学校および教会で制度化されたことの意味が自ずから明らかになってこよう。こうした観点から、18世紀第1次法令集である Corpus Constitutionum Marchicarum および Novum Corpus Constitutionum をみていくと、公教理問答教授一試験にかんする諸規程が布告されていたことに気づくのである。以下では編年体で主要な諸規程を紹介しておきたい。

〔2〕 1713年『福音＝改革派監督区・長老会・教区監督区<sup>(5)</sup>・ギムナジウム・学校令』（Königliche Preußische Evangelische＝Reformirte Inspektions-Presbyterial-Classical-Gymnasien-und Schul-Ordnung）<sup>(6)</sup>は州単位に1ないしそれ以上の監督区を策定し（I）、各教区（Parochie）ごとに「教区監督会議 Classical-Convent」を査察時に開催し、ここで公教理問答試験を実施す

ることを定めた(Ⅲ、第Ⅰ、Ⅵ条件)。もちろん改革派では『ハイデルベルク教理問答書』の使用を本規程は義務づけているが、そこで教授されるべき主要内容が「ヘルの畏敬」——それ自体対象無規定な紀律——の習得におかれていた(Ⅳ、第Ⅱ条)ことに留意される必要がある。1720年の『規程』(Verordnung, an die Inspectores wegen derer zu haltenden Catechismus = Peredigten, und was dabey zu beobachten, insonderheit wegen derer zwischen beyden Evangelischen Religionen streitigen Punkten)<sup>(7)</sup>は非常に重要である。すなわち、①ルターの『小教理問答書』が改革・ルター両派共通に「公教理問答試験」と「公説教」で使用されることが「必要」とされ、②『小教理問答書』教授は3年を1サイクルとする、③4年目で各宗派の教理の教授がなされる。1724年『規程』(Verordnung an die Inspektoren wegen Haltung der Catechismus-Predigten)<sup>(8)</sup>はとくに『小教理問答書』教授の効果が4年たっても期待したほどではないという認識に基づいてその問答方式による教授—学習の強化を監督=査察官に指示した。1734年4月の『プロイセン教会・学校制度改正規程』(以下、改正規程)は教会公教理問答教授(日曜日)・週日教理問答書教授(水曜日)に生徒の出席を義務づけ、続く10月の『規程』はとくに説教師が日曜公教理問答教授をいまだ熱意をもって取り組んでいない現状を指摘し、監督=査察官に監督区内説教師にこれを是正させるように命令した。<sup>(9)</sup>その後上記の法令集で公教理問答試験—教授にかんする規程で出合うのは、1754年『ミンデン・ラーフェンスベルク農村学校条令』(以下、ミンデン学校条令)、1763年一般地方学事通則以外には、1765年の『学籍簿規則』である。後者は一般地方学事通則の実施要項の性格をもつもので、監督=査察官が記載する所見欄の第1点には教区説教師の公教理問答教授法の査察評価がおかれていたのである<sup>(10)</sup>。1775年にはいよいよ新領有地西プロイセンにたいする規程、『日曜・祝日にかんする公告』(Publicandum wegen der Sonn=und Festtags=Feyer in West=Preussen)<sup>(11)</sup>が現れるが、ここで礼拝の核に日曜朝の説教と午後とその説教にかんする全会衆の公教理問答試験とその結果に基づく公教理問答教授が説教師に命ぜられている。以上簡単に公教理問答教授—試験にかんする規程を駆け足でみたが、この教授—試験の法制化が、祝祭日の削減および日曜日への移動とともに、日曜および祝祭日を教区民の公的生活圏として時間的に制度化する契機となっていたことにもついでに注意をむけておきたい。

[3] さて、それでは公教理問答試験—教授で監督=査察の対象とされた教理と私生活上の行為の準則はどのような内容であったのか。ここではそれを、別の機会で試みた結果を援用しながら、主として1734年改正規定、1754年ミンデン学校条令、1763年一般地方学事通則にそくして解析してゆこう。1710年の『一般査察勅令』前文は変革されるべき教区民の信仰・生活の現状を「無秩序」と表現しているが、これは上掲1720年『規程』で「無知」と言いかえられる。以降「無知」は改正規程、ミンデン学校条令、一般地方学事通則でも使用され、これへの取り組みが教会・学校改革で最大の柱に位置づけられた。それではいうところの「無知」の内容は如何なるものであったのか。

まず諸規程の前文からみておくと、①「神の認識と畏敬」の欠如(改正規程前文)、②「真理」(=神)の「認識」の欠如(ミンデン学校条令前文)、③「真性な敬神 Gottesfurcht<sup>(12)</sup>」の欠如(一般地方学事通則前文)、とそれぞれ端的に記されている。①～③は「キリスト教の基礎知識」に関するもので、これらの諸規程は徹底した教理問答教授によってこの「基礎知識」欠如を解決することを目的にしている。そのため、従来これらの規程がうまれる背景に敬虔派グループの「純粋な宗教的動機」と同時に「キリスト教教化」という政治的動機があったとみられて

きた<sup>(13)</sup>。しかし、この通説で最大の問題点は、「純粋な宗教的動機」が「キリスト教教化」へ展開されることの論証を要しない自明のこととされ、そのために肝心の《如何にして宗教上の教義が権威的な倫理的・イデオロギー的な価値規範へ転換されるのか》が分析の対象にすえられなかったということである。われわれはこのテーマの考察を、試論の域をでないが、回避することはできない。

1765年カトリック派一般地方学事通則第50条は宗教的目的と教化的目的を恐らく初めて明示＝規定したものとして注目される。宗教的目的については「成人臣民が神、隣人及び自分自身に対して有している義務」、教化目的については「主権者たる朕と朕の下にある権威 Obrigkeit にたいして負っている、忠実、従順および堅固な忠誠の義務」と区別されてしめされている。ここでは、神・隣人・自己自身に対する義務（以下では《第1義務》と記す）と国王・公権に対する忠実・従順・忠誠の義務（以下では《第2義務》と記す）とが等価の関係におかれていることに留意しなければならない<sup>(14)</sup>。この両者の義務関係を、さらに、まず他の諸規程に記述されている教理にそくして整理し、これを次にルターの『小教理問答書』と『大教理問答書』から引証しておきたい。

1754年ミンデン学校条令で展開されている「キリスト教の根本教義」は、本条令の宗教的目的と教化的目的との未分化を示すものであるが、上記の《第1義務》と《第2義務》を等価関係におく因子を解説していると言うことができる。その該当箇所を摘記しておこう。「人間の精神は病める」「死せる状態」にあり、「人間は自然のままではあらゆる善をなしえない」「哀れむべき状態に在る」（14条）、この「哀れむべき状態」は「自愛 Eigen=Liebe」であり、これは特に児童に内在する「すべての罪惡の根源」である（18条）、神は学校の内外＝全生活において「何時、如何なる場所」にも「遍在」する（16条）、児童は、神、主に対する「畏敬の念」を持ち続け、自己の「意思 Willen」で「万事が神の思い召しに叶うように振舞い」、「真に神を崇め敬い、ひたすら己の救いを求め」なければならない（17条）、「不服従は厳しく処罰」されなければならないのである（18条）。ここでは、「自愛」＝自己否定による《神への畏敬》と擬似主体的な、自己の「意思」による《神への無条件の心服》が驚くほど強烈に主張されている<sup>(15)</sup>。

ところが、一般地方学事通則では一転して、「キリスト教の必須事項」の「理解をいっそう深める」こと、「教理問答書中のルターの為せる解義に就いては、ただ上級の児童にのみ、之を幾度となく繰返し斉読すことに依りて暗記」（19条）させるにみられるように、実践的な指示をだす条文に変わる（上記条令14―17条の削除）。すなわち、《第1義務》と《第2義務》についての解説は『小教理問答書』に委ねられてしまっている。そこでわれわれもその解説に目を転じてみよう。

『小教理問答書』は「神の十戒」の内、「第4戒は、子供たちと、一般の人々」にとって重要であり、とくに「聖書から、多くの例証を引き出して、おしえねばならない」<sup>(16)</sup>という教授原則を指示している。それでは何故第4戒が重視されているのか。その理由は第4戒が、『大教理問答書』において、聖俗《支配―服従関係》を原理的に解説しているからである。すなわち、《「靈的支配」＝「神の権威」―キリスト者》関係が第1次的支配＝服従関係で、聖の「秩序」であり、《「神の代理」＝「この世の権威」＝「全国土の父」―キリスト者》が第2次的支配＝服従関係であり<sup>(17)</sup>、俗の「秩序」である。「この世の権威」は「公権」である（第5戒）。この「例証」として、例えば「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものなのです。したがって、権威に逆らう者は、神

の定めに従うのであり、背く者はわが身に罰の宣告を招きます」(ローマ人への手紙13章1-2)があげられているのである。

それではこの聖俗《支配—服従関係》の可変的な共存を内面的態度のうちに可能にする心理的因子は何か。それが、じつは、ほかならぬ、《絶対的服従》《謙虚・恭敬》《尊敬・服従》《従順》であったのである<sup>(18)</sup>。ただし、これらの心理的因子は具体的な態度決定においては自己否定による《聖—俗権威への畏敬》と擬似主体的な、自己の「意思」による《聖—俗権威への無条件の心服》として現れ、同時にこの態度決定に方向定位をあたえる実践的な行動基準ともなったのである。さらにつけくわえると、《俗権威》をグーツヘルからランデスヘルへ置き換える《媒体》もまたこれらの心理的因子であったこともいまや新たな説明を要しないであろう。

以上のように公教理問答試験—教授は、ルターの『小教理問答書』に指示された指導原則に基づいて、全教区民の内面的態度のうちに、まず自己否定による《神=ヘル》について《ランデスヘル》への《畏敬》および擬似主体的な、自己の「意思」による《無条件の心服》を機械的反復記憶によって慣習化し、ついに《グーツヘルにたいする人格的隷属》を《ランデルヘルにたいする人格的服従》へ転換(=第1義務から第2義務へ転換)させる重大な使命をになっていたのである。このように制度化された公的試験—教授体制による外からの内面的態度における関係意識の変革こそが社会的紀律化の特質にはかならないのである。

〔4〕最後に私領主所領区域内同様に絶対主義国家の権力の作用が著しく制限されていたカトリック派教区における《司祭—農民関係》を《ランデスヘル—農民関係》へ意識変革する社会的紀律化にも言及しておきたい。《司祭—農民関係》の強固な結合関係が福音派教区民との軋轢や反プロイセン的教皇主義の《元凶》であるという強烈な認識がカトリック派司教の宗務権限剥奪と祝祭日規制にかんする諸官房令等でしめされていた。これはとくにオーバー・シュレージェン、西プロイセン、南プロイセンといった新領有地に顕著であった。これらの地帯における社会的紀律化は祝祭日規制といった伝統的な慣行(=精神的情緒的制度)の制限・解体と同時にドイツ化の推進にあった。このドイツ化の基軸に礼拝と学校教育が位置づけられていた。これについては別の機会に言及する予定であるので、ここでは社会的紀律化の基本的戦略をみておきたい。まず《司祭—農民関係》の実態についていま一度確認しておこう。1789年9月11日のプレスラウ司教総代理報告に述べられたオーバー・シュレージェンの村落教区はこの点を象徴的にしめしている。すなわち、「村落民のあいだに、明白な母語の土地生まれの司祭に愛着をもっている、彼らの自然な結びつきをなによりも完全に信頼する顕著な傾向がみられる、村落民は、従って、かかる司祭職の排除およびよそものを教会の理事に任命することを、耐えられない強制とみなした。」彼らの経験的事実にはプロイセン国家・国王という観念、まして「陛下にたいする義務」観念は存在しなかったのである<sup>(19)</sup>。こうした教区における紀律化は、《シュレージェン方式》と称されたが、第1に、祝祭日削減と日曜礼拝強制によって新たな義務領域(=教会礼拝の遵守、労働時間の厳守)を制度化し、第2に、すくなくともこの義務領域において、司祭を超える神=絶対的権威にたいする《無条件の心服》を繰り返し追体験させ、第3に、教区司祭に最高司教であるランデスヘルにたいして従順・忠誠を誓約させた、ことであった。次にこの社会的紀律化を命じた文書をみてみよう。

1776年6月7日の西プロイセン政庁宛閣令では、教区民が「聖職者とランデスヘルに忠誠をしめし、忠実なるかつ従順な臣民として行為」するように紀律化することが礼拝および教育の

使命であると認識されていた<sup>(20)</sup>。1785年3月4日にクルムの司教に発布させた『教書』は、西プロイセンのこの社会的紀律化を方向づけた重要な文書であった。社会的紀律化の第1原則は「権威 Obrigkeit にたいする自発的な服従」、「各自は権威 die obrigkeitliche Gewalt に従順であること」である<sup>(21)</sup>。第2原則は「権威に反する者は神の秩序に反する者である」<sup>(22)</sup>。ここでいう《権威》はもちろん「われわれの国王」「われわれの主」を意味する。この《権威にたいする自発的な服従＝従順心》を形成することが学校教育の使命とされたのである<sup>(23)</sup>。

## II. 教区査察による公的生活圏＝社会的紀律化空間の創出

〔1〕 18世紀絶対主義国家の教会・学校《支配》がいわゆる《中間諸勢力》の領域にまで及んだか否かという問題は、ここで縷言するまでもなく、公教育成立史研究史上最大の争点になっている。研究史ではこの《支配》を実証的に検証する観点として学校および教師にたいする監督にはば限定されていた。そのうえ具体的な考察においても監督の機関が国家中央機関どまりで結局関係法文による法制の解釈が主要な作業となっていた。しかし、既述したように、教会・学校にたいする直接の監督機関は監督官でその執行が査察であったのである。上記の研究史上の問題点を検討するためには現在の段階では査察に考察の対象が据えられなければならない。このための史料が『教会・学校査察報告文書』であるが、18世紀の報告文書は全て未刊行でしかも完全なドイツ文字による手書体であるためにその解読が容易ではなく、したがって使用される数は自ずから限定されざるをえない。以下では最初にベルリンから約60キロにあるミュンヘン監督区教区の現状、次いで複数の教区査察説教を取りあげながら社会的紀律化の実効を検証しておきたい。

ミュンヘン監督区では、1726年段階で私領主所領区域教区への査察は私領主パトロンによって拒否されていた。この状況の改善は1736年9月の査察規程でようやく着手され、監督区9教区の査察が実施されている。<sup>(24)</sup>しかしながら私領主所領区域教区で私領主パトロンが査察に協力的な姿勢をしめず報告に出合うのは1766年の文書であり、以降国王側の攻勢が目につく。その理由として1765年の『学籍簿規則』にもとづく査察項目の整備があげられる。1768年の報告によると明らかに学籍簿にもとづく査察が私領主所領区域教区にたいしても実施されている。この実施報告にもとづいて、国王は、私領主パトロンがその所領区域教区の就学不振の改善に着手しない場合に、必要な《命令》を発する用意があることを査察時に私領主パトロンに通告している。ただし、この警告の有効性については疑問で、当監督区の夏季学校の就学不振は査察のたびに報告されている。いますこし就学状況をおってみよう。就学不振の要因は両親の就学にたいする無関心の他に経済的貧困ととくに年長児が夏季労働に不可欠であったことに起因していたとみられている。これは他の監督区でも同様であった。しかし、1771年の査察は、もちろん依然として夏季学校が開校されない学区の存在を指摘しているが、その反面、夏季学校の閉校が少なくなってきたことをも認めている。この傾向は7年後の1778年でも確認される。この時点で夏季学校の常時開校が問題とされていることにむしろ注目する必要がある<sup>(25)</sup>。かといってこれを過大に評価することも戒めなければならない。現実には、国王と私領主パトロンとの凌ぎあいが続いている。だが1796/98年文書によると私領主所領区域教区にたいする査察は障害なく実施されており、その報告は当然に所領区域教区おける就学状況の劣悪

さを指摘し、あわせて私領主パトロンの就学にたいする無関心を批判している<sup>(26)</sup>。このように、ミュンヒェベルク監督区においては決して私領主パロンがその所領区域教区にたいするランデスヘルの最高司教権を遮断しえたのでもまたランデスヘルがその最高司教権をもって私領主所領区域教区を支配しえたのでもなかったのである。だが私領主所領区域教区にたいする査察が1730年代に可能となり、1760年代で私領主パロンに拒否されることなく実施されていたことに注目しなければならない。繰り返すように、査察自体がランデスヘルの最高司教権の行使であったからである。そこで、つぎに、私領主所領区域教区で具体的にどのように査察が実施され、査察官が教区民の信仰および私生活について如何なる監督をせんとしたかを査察報告から読み取っておきたい。そのためには査察着手時の1737年報告が有効である。

〔2〕 最初に個別教区からみておきたい。対象はノイエーンテンツェル教区／ディーダースドルフ支教区である。当教区（25世帯）／支教区（25世帯）は完全な《中間勢力》地帯、すなわち私領主所領区域に属す。ここに、1736年、査察がはいっている。査察には教区から1名の農民、支教区から3名の農民が参加した（いずれも上層農民で残りは私領主農場で就業）。教会で説教師 Chr. L. シュバンゲンベルクが査察説教（「コリント人への第二の手紙」第8章の「逐語的」説教）そしてこれについての試験が実施された。その後説教師の説教と人格について意見がかわされ、「教区民は全ての点において彼に満足している」という評価がくだされる。次にキュスターの評価が続き、彼も「非常に良好」となった。しかし私領主はキュスターを今後採用しない方針をとった。これに説教師は賛同しかねていた。学区は教区＋支教区で一学区を形成する。就学状況は良好で説教師および教区民ともに学校を「非常によい」と証言した。以上のように当教区と支教区における教会礼拝と就学状況は共に良好と評価された。教会および学校は教区民にとって礼拝および就学の義務が遂行されるいわば公的な場であったということができよう。この公的場における教区／支教区民の行動はよく管理され、説教師との関係も良好であった。この評価は、もちろん、査察官、説教師および出席上層教区民の共通認識であった。このように、教区には公的な、義務をはたすべき場が存在するというイメージが次第に一つの世界として、査察によって、説教師および教区民に対象化させられたともいうことができる。この世界が次第に公的生活圏として制度的に実体化され（礼拝・祝祭日規制）、とくに学校→家庭の生活圏も青少年の思考と行為を管理するシステムへと整備されていくことについては筆者はすでに別の機会に明らかにした<sup>(27)</sup>。だが、査察が本格的に着手された1736年当時においてこの世界は、いまだ、私領主所領区域が領民にとって「幸福に」感じられる場であったという私領主の世界観の再生であったとみななければならない。したがって、教区民の私的な生活圏という今一つの世界は否定されるべきものとして認識されていた。そのことを物語る事件が発生した。発端は、当教区に放浪の女性物乞いマリア・シュタインブレヒェリンが教区に入りこんだことにあった。当時私領主所領区域はすでに周知のように放浪者を厳しく排斥していた。これは共同体規制の一つである。ところが教区民は彼女の入村を「好意的に迎えた」のである。これにたいして私領主と説教師は彼女が「善行をせず、神を無視し、村民の欲望を刺激している」とみなし、教区民の態度を非難したのである<sup>(28)</sup>。この事件（結末は不明で）で私領主および説教師の教区民にたいする愚民観が明るみにだされた。すなわち、教区民は信仰に篤い存在ではなく、欲望をみたそうとする無信仰に陥りやすいあの「無知」な、したがって信仰によって善導されなければならない対象として認識されていたのである。ところが、この愚民観から、まったく逆に、排他的で、禁欲的な、私領主に従順な私領主所領区域に特有な人間類型とはことなっ

た、すなわち自己の欲求に鼓舞された村民の相貌が彷彿としてくるであろう。以上のことはまた同年査察の監督区全体の報告からも確認される。

上述したように1736年にミュンヘベルク監督区20ヶ村9教区の査察が9月7日から12月21日にかけて実施された。なお9教区中8教区が私領主パトロンの私領主所領区域教区・支教区である。ここでわれわれが注目するものは、全教区および支教区の民情報告である。これを次に列挙しておこう。賦役農民、兵役登録者は、i) 日曜・祝祭日に傍若無人に荒れ、無秩序になる、ii) 居酒屋で泥酔し、遊び、踊っている、iii) 賭博でスッカラカンになっている、iv) 好色にはしっている。その他の教区民も、v) 日曜と祝祭日の礼拝に出席しない、vi) 晩拝時に上層の者まで居酒屋でビールを飲んで、vii) 三王来朝祝日に仮装し、紙の王冠をかぶり、ハツカ鼠をつれて歩いている、viii) 若者は夏季に家畜番のために教理問答教授と試験を欠席している、等々であった<sup>(29)</sup>。この報告でも査察官の教区民＝愚民観がよく表れている。とくに日曜・祝祭日礼拝の欠席は、従来の研究史にみられる認識では、教区民が未啓蒙な状況にあることを立証するもの、さらに教会・学校諸規程が發布される背景の事実として描かれることになる。この歴史認識は結果的に教区民＝愚民観からキリスト教教化策という図式を暗黙の了解事項としている。しかし、われわれは、ノイエーンテンツベル教区とディーダースドルフ支教区の事例同様に、教区民が彼らの欲求充足を礼拝および就学よりも優先している事実にまず目をうたれるのである。彼らは、とくに三王来朝祝日の行動に典型的に表れているように、可視の次元では教会儀式を一見無視しているかのように見えるが、しかし三王来朝祝日を彼らの私的な日常生活圏の延長上で歓楽の対象として乱痴気騒ぎを演出しているのである。これが査察によって処罰と禁止の対象として新たに発見されたときから、その反対の事象として紀律と管理がゆきとどいた世界、すなわち公的生活圏が、おぼろげながら一つのイメージをもって、教区世論のなかに姿をあらわしてきたのである。査察官はi-viiの礼拝拒否について国王にその処分を一任し、viiiについては不就学を就学規程にしたがって処分すると同時に聖餐式出席を拒否した<sup>(30)</sup>。この査察官の対応においても公的生活圏は国王および国家法が支配する場としてすでに認識されていたのである。もちろんこの公的生活圏では説教と教理問答教授一試験によって、神とランデスヘルにたいする《畏敬》と《無条件の心服》が教区民に注入されることになる。1736年に本格的になる私領主所領区域教区への査察は、以上のように、ランデスヘルと国家法が直接介入する公的生活圏を教区民に対象化させた、換言すると教区民の私的生活圏のなかにランデスヘルにたいする《畏敬》と《無条件の心服》に基づいて彼らの内面的態度を変革する意識空間を作り出したところに最大の特徴があったといえよう。社会的紀律化は外的制度によって内面的態度に方向定位をあたえるものであるがゆえに、査察が私領主所領区域教区に社会的紀律化が実践される制度を作り出す第一歩を切り拓いたことにわれわれはまず注目しなければならない。

〔3〕 社会的紀律化の実効が教区単位で査察文書より確認できるのは19世紀に入ってからである。これをパプリッツ教区の1818—1827年の査察文書からみておきたい（次頁表）<sup>(31)</sup>。ケムリッツおよびシェーフェルトは共にパプリッツ教区の支教区である。査察が細部にわたって実施されるのは、その記載項目からみて、筆者が解読した文書では1810年代以降になる。パプリッツ教区査察文書はその代表的なものである。査察項目のみを列挙しておきたい。1) 教会・学校建造物の整備状況、2) 教会・学校会計検査、3) 教会台帳の管理状況、4) 説教師・教師の資質と人物評価、5) 教会書類の管理、6) 教会・学校理事会の活動評価、7) 学校査察、

1800年 (支) 教区	礼拝出席				日曜・祝祭日				教会紀律				信仰態度				教理問答教授			
	18	21	24	27	18	21	24	27	18	21	24	27	18	21	24	27				
パブリッツ	◎	—	○	○	○	—	—	—	○	—	○	○	○	—	○	○	×	×	—	●
ケムリッツ	●	—	●	●	—	—	—	—	—	—	●	●	●	—	●	●	●	○	—	○
シェーフェルト	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	○	○	×	—	○	○	○	●	—	○

註1. 《礼拝出席》の○は良好, ◎はかなり良好, ●は極めて良好, ×は不良をしめす

註2. 《日曜・祝祭日》の○は日曜・祝祭日規則の遵守をしめす

註3. 《教会紀律》の○は静粛・秩序が維持されておりかつ真剣であることをしめす

註4. 《信仰態度》の○は敬虔で信仰に篤いこと, ◎はかなり篤い, ●は極めて篤い, ×は不信仰をしめす

註5. 《教理問答教授》の○は良好, ◎はかなり良好, ●は極めて良好, ×は不良をしめす

註6. —は査察報告に記載がないことをしめす

8) 教区民の礼拝出席・日曜祝祭日規則遵守・教会紀律の維持・信仰態度の評価。これらのうち3は1766年(『教区台帳書式規程』)に, 7は1765年(『学籍簿規程』)にそれぞれその書式が統一されている。1817年査察では台帳は学校教師が記帳・管理し, 各年度の正台帳は郡裁判所で保管されその写本が教区(=学校教師)の手元におかれている。この台帳と学校簿によって教区民全体の洗礼→堅信礼→就学状況から職業・結婚・兵役・交際関係に至るまで教会および学校で管理される体制がすでに完成されていることがわかる。その管理に加えて監督体制も, i) 教会・学校建造物の管理・維持, 会計検査そして教会・学校理事会の活動, ii) 教会内部の紀律(静粛・秩序が維持されかつ真剣であるのか否か)および学校生徒の学力, iii) 信仰態度(敬虔で信仰に篤いか否か), にまで及んでいた。もちろん, これらの項目は1811年以前にも管理および監督の対象になっていた。しかしながらこの時点でこれらの全項目が, 建造物という《外的体制》, 教会・学校内部の規律という《内的体制》, そして信仰態度という個人の《内面的体制》の三体制に構造化され, その構造が一つの管理と監督体制に統合されていることにわれわれは注視しなければならない。パブリッツ教区はいまや管理・監督の一空間の相貌を呈するにいたったのである。上掲の表にふたたび目を転じると, ケムリッツ支教区(=一学区)は, 他(支)教区と比べて, 《礼拝出席》・《日曜・祝祭日規則の遵守》・《教会紀律》・《信仰態度》のすべてにわたって《極めて良好》と評価されているが, 学力においてもまったく同様であった。ケムリッツ支教区では1817年当時, パブリッツ教区内で, 社会的紀律化がもっとも典型的に実効をおさめていたとみなすことができる。ここでは支教区も公的生活圏としての体制をすでに整えていた。この体制がまた19世紀に実体化される公的「団体」化の現実的な土台をなしていたことにも止目しなければならない。

ケムリッツ支教区とはほぼ同様な支教区としてハマー村があげられる。ハマー村の村長他数名の名望家層はすすんで当村の独立学区=支教区化を実現した。その理由は, 当村でのキリスト教通過儀礼(新生児6週目の祝い・洗礼・結婚式等々)の執行, 日曜祝祭日礼拝の定期出席および公教理問答教授試験の実施が強く望まれていたことに起因する。この支教区化がリーベンヴァルト教区との関係で最終的決着をみるのは1804年である。約96年の長期間にわたって訴訟が継続された。当村は御料地で35世帯の小村であった。それにもかかわらず, この問題にたいして国王一枢密参議会一宗務局一管区長といった宗務の全監督機構が関与していたのである。御料地とはいえ小村の教区化にベルリンの宗務監督庁がこのように異常な関心をしめしたこと

のみならず、その監督機構がすでに1708年当時で小村にいたるまで機能していたことにもわれわれは驚きを禁じえない。一方、クヴィリッツ教区はケムリッツ支教区およびハマー支教区とはことなっている。クヴィリッツ教区では私領主所領時代から高い基礎学力を有し、かつ私領主にたいして厳しい服従の義務を負っていた。この私領主所領時代における共同体成員の同調性は、ランデスヘルに領主が変更した後に、従来の伝統的な慣行・制度を変更する命令にたいして強い拒否的な対応をしたことにみられるように、自己収束的な特徴をもち、したがってランデスヘルという新たな権威への意識転換を阻む強力な障壁となっていた。このことは、私領主所領区域教区における教区民の内面的態度の変革が、領主が私領主からランデスヘルに変更した場合にでも、決して容易なものではなかったことをしめす好例といえよう。したがって、査察は当然にこの内面的態度の変革に力を傾注した。そこでわれわれは、次に、査察時において実施された説教に注目し、そこで意図された変革の論理を摘出してみたいとおもう。査察説教は、教区民の知的（言語系基礎学力）水準を前提にして、その説教が紀律化の現状を打開ないし向上させる目的に適切であるか否かについて審査することを目的とするものである。とりあげる説教は i) クヴィリッツ教区査察説教, ii) ホーエンクヴァルト教区査察説教, iii) ラゴフ教区査察説教である。

〔4〕 クヴィリッツ教区査察説教は1812年11月11日に、教区牧師ペーマーによっておこなわれた<sup>(32)</sup>。説教は「光と真理」→「暗闇」という対概念を使って進められた。その要旨を順に摘記してみよう。

「光を、あなたは、ああ主は、われわれの死せる眼にお与えくださった、われわれの足が滑りつまづかないようにと、そして真理をあなたはわれわれの精神にお与えくださった、われわれが暗闇の中で立ち止まらないように、そればかりか、われわれが光と真理の中で立派な行いができるようにと」／「愛する父は、いつもわれわれの精神の眼を永遠の光によって照らして下さっています」／「世俗の人々は、愛に貧しく、同情と協力に乏しく、自分の願いごとが拒否されると深いため息をつきます、そして熱い望みや高価な希望が挫折すると深いため息をつきます」／「われわれは冷静に、光と真理、知識と洞察、知恵と徳が拡がり、光と真理によって見ることができない神の王国を、地上で多くの勤勉な市民は得ています」／「それゆえに、怠惰で、真理と光に与かることに無関心であってはなりません」／「平穩、期待そして希望は分別の王国にのみ可能で、しかも敬虔な心にもみ宿るものです」／「しかし成人した者がすべての真の分別を喜ぶとはかぎりませんし、福音の訴えを聞くととはかぎりません」／「生活と行いを改善し、地上の神の王国に耳を傾けなさい」／「誤った不信仰の行いでは、神から生まれた真理を期待できないでしょう」／「光と真理があなたがたの感性を照らし、あなたがたの心を温め、理解力と洞察力、知恵とあらゆるキリスト教の徳を育むのです」／「あらゆる人間の使命は、光と真理の中で、さらに知識と知恵の中で、正義と敬虔のうちに行いをすることです」／「暗闇は無言で冷たいものです」／「陰鬱は暗黒を好み、強欲と悪はただ暗闇に忍びこみ、暗闇を好みます」／「全世界を神たる父は、光で包み、光はすべての創造物を生き生きと活動させます、光の中でのみ、人間と動物、花は栄えます、光は地上における生、喜び、そして至福の源です」／「人間は光の中で、その生の使命と喜びを見いだします」／「世界のための、日中の光であるところのものが、生、人間の精神のための真理であるのです」／「真理は神の光から誕生し、天の本来の光なのです、なぜならば神は光であるからです、神は至福の光の中に宿っているからです」／「全ての可視の外的世界の喜びと至福は、神がその太陽によってあまねく照らしている光の中にあり、人

間が胸のうちに抱く救いと至福は真理を識るなかにあります」／「神がその子イエス・キリストの福音の中に与えられた光が生を照らさなければ全ては暗闇のままであり、われわれは偽りと迷信のままとなります」／「イエスの宗教の祝福は、したがって、光と真理であり、光によって認識と知恵になり、真理によって喜び、平穏そして平和となるのです」／「主の喜びにかなうように行為をしなければなりません」／「敬虔な者は、喜び、感謝そして心の不安から祈るのです」／「光と真理を認識し、使うことによってのみ、善き業は実りあるものとなるのです」。

すでに明らかなように、クヴィリッツ教区の現状は《暗黒》と形容されている。《暗黒》は当時の人々にとって《恐怖》と同義で、悪と死が支配し暗躍する不安と孤独な異教の世界としてイメージ化されていた。クヴィリッツ教区のように知的水準が高くランデスヘルの命令に強く抵抗する場合には、このように、一旦、彼らの宗教的情念を《暗黒》の世界へ引きずりおろし——説教の展開はクヴィリッツ教区民が否応なしにこの《暗黒》の世界へ陥らざるをえないように進んでいく——、不安と恐怖の状態をつくりだすことが有効であると認識されていたようである。その一方で、常に、《暗黒》の反対事象に《光と真理》が対置されている。教区民が《暗黒》の世界から《救済》され《光と真理》の恩恵に与えることができるためには、第1に《真理と光》を「認識」し、第2に生活を改善し敬虔に主の喜びにかなうように行為しなければならない。本説教で直接にランデスヘルにたいする服従を説いた文章は見いだしえなかった。これは特筆することではない。繰り返し言及したように、聖権威への《畏敬》と《無条件の心服》が徹底すると、それが権威への無自覚な服従へと容易に転換するからである。その可能性についてはクヴィリッツ教区牧師ベーマー自身がもっとも身近な体験によって承知していたのである。彼の査察説教がそのことを立証している。

〔5〕 ホーエンクヴァルト教区はフランクフルト監督区に属し、フランクフルトより南東に位置する。査察説教は説教師ゲディケによって1813年におこなわれた<sup>(33)</sup>。最初に当教区民の知的水準と信仰態度についてみておきたい。1813年当時当教区では依然として夏季学校が完全閉校されていた。シュールマイスター自身も当教区に「すぐれた学校制度を実現することは不可能とみていた」。その最大の理由は住民がその子女の就学に「熱意を欠いている」からであった。授業料はすでに全戸の公課となっていた。当村はかなりの貧困村であった。これが、窃盗の頻発を誘発し、「道徳的行為の進歩」を妨げていた。しかしながら、教会・学校施設の維持・会計検査・教会台帳等の管理さらに教会と聖餐式への出席はいずれも良好であった。

さて、査察説教は「エピソードへの手紙」第6章11についてなされた。その内容は極めて単純な図式的な展開となっており、その筋を摘記する。「此の世は悪への誘惑（刺激）」にみちている／（したがって）「われわれの心の監視が必須」である／「道徳の完全」と「成熟」は「努力と戦いなくしてはえられないもの」である／「悪への誘惑」は「われわれ人間の心の罪深い行為と性向から生」じ、「その人間の考え方と行動様式は非常に危険」である／「われわれが悪人から誘惑されないためには悪人を友人にしないことである」／「われわれが悪人との交際を求めるときには、すでにわれわれの道徳的状況が疑わしくなっているのである」。

ところで「エピソードへの手紙」第6章10—20は《悪にたいする戦い》を語っているが、上記の説教も教区の《悪＝窃盗の頻発》を念頭においたものである。説教の内容自体は、指摘したように、非常に単純な構成になっており、具体的な行動指針を与えることを意図している。社会的紀律化はつねに権威への《畏敬》と《無条件の心服》のみに向けられていたのではなく、この説教でみられるように、教区民の日常的行動に具体的な方向性を与えることもその重要な

使命としていたのである。

〔6〕 ラゴフ教区はベルリンから南々西約25キロに位置し、ミッテンヴァルト監督区に属す。教会パトロンは私領主である。当教区の教会・学校施設は良好に維持され、墓地の管理も十分であった。基礎学力については「満足できる状況にあった」。説教師は教区民に尊敬され、教区民は礼拝に熱心で、教会には秩序が保たれていた。説教後、これについて教理問答教授が実施されている。聖餐式の出席も模範的である。査察説教は1812年に説教師シュルツエによっておこなわれた<sup>(34)</sup>。説教は《不満足》→《満足》という対概念を使って展開された。ここでもこの概要を摘記してみよう。

「世間で時代が悪く幸福ではない、窮状にあるという不満のみが聞かれる」／「人間というものは欲しいものを全て手にいれても、つねになお何か欠いているとおもうものである」／「その何かとはなにか、それは満足、満たされた快適な心である」／「不満の源泉は、己を立派とみなし、他人より立派で他人よりも神の祝福をえるによりふさわしいとみなしている自愛にある」／「満足とは己の運命に満足することである」／「(満足とは) 神が与えたものに満足し、喜び、他人の幸福と比較しないことである」／「(満足とは) われわれの欲望を抑え、われわれの欲求を適度なものにしよう努めることである」／「満足は神からの祝福であり、賜物である」／「此の世は、神の支配の下にある」／「満足は神への真の偽りのない信頼であり、神の支配を確信することである」。

《不満足》→《満足》という対概念の設定は上記冒頭の2文章にみられるように、当教区に現体制にたいする不満が鬱積し、一方で「自愛」を徳とする行動も顕在化しているという現状を考慮してなされたものであると考えられる。興味深いことは、私領主パトロン教区における「自愛」、換言するとあの欲求の充足を追求する私的生活圏を如何に転換するかという課題にこの説教が正面から取り組んでいたことである。したがって、説教も現秩序を根底から転換する論理構成、すなわち「現世が神の支配にあること」を軸に展開された。これは、私領主の権威にも超然とした絶対的権威にたいする「信頼」と「確信」によって教区民の内面的な秩序観念に変革を惹きおこすことを狙っているものである。この方法はすでにみた『小教理問答書』の教授原則の典型的な適用であった。

## おわりに

以上5例をあげて教区における社会的紀律化の実効を検証してきた。時期は大きく分けて、私領主パトロン教区への査察開始時1736年とプロイセン改革期の渦中であって教区—学区が統合の単位、すなわち公的「団体」化の道程を歩み始めた1812/13年であった。前者の段階では、査察によって、教区民の私的生活の場（ここではそれに《私的生活圏》の用語を当てた）に、ランデスヘルとその法によって管理・監督される場（ここではそれに《公的生活圏》の用語を当てた）が作りだされた—— a) 査察時における教区民全員対象の教会査察説教→これについての公的（全会衆前での）試験→この結果に基づく補習教理問答教授、b) 青少年にたいする『小教理問答書』の公的試験→補習教理問答教授、c) 学校における管理体制一。ここでとくにc) についてさらに2点補足しておかなければならない。第1点は、すでにみたように<sup>(35)</sup>、学校の内部自体が生徒の思考と行為を管理し、教師の「専制主義」→生徒の「精神的隷属」「権

威にたいする服従」を強制する体制になっていたことである。生徒は規則上少なくとも冬季間日中6時間この体制のもとにおかれるのである。第2点は、1766年のヨアヒムスタール校の個人調書にかんしてであるが、就学不振ないし未就学児童の保護者にたいして管区長および教区説教師が出頭を命じ、その「義務を明確にさせた」ことである<sup>(36)</sup>。これは、すでに1765年の『学籍簿規程』で定められた、欠席および未就学児童にたいする説教師および査察官の処置の適用例であるとみなしてよい。児童は学校で権威的な管理体制に自己の行動規範を適合させると同時に『小教理問答書』の教授原則にしたがって内面的態度の変革を強制されたのである。そして教区民は学校を媒体にして《公的義務観念》を持ち込まれたのである。この2点より学校自体も《公的生活圏》とみなされなければならない。だがこうした社会的紀律化が教区民の私的生活圏に如何なる実効をおさめたのかという点になると、その検証は著しく困難となる。1736年のミュンヘンベルク監督区9教区の事例から明らかなように、私領主パトロン教区においてランデスヘルおよびその法によって管理・監督される《公的生活圏》が制度化されたことに注視しなければならない。教区民にたいする《国家統合》は、すくなくとも、18世紀においては、なによりもまず、彼らの《私的生活圏》に《公的生活圏》をつくりだし、この《場》——意識空間——で彼らの思考と行動を規制する社会的紀律化過程としてあらわれざるをえなかったのである。《国家統合》される《場》は理論的にも現実的にも、これまでの政策史研究で暗黙の前提とされていた、すなわち所与の事実としては、存在していなかったのである。

一方、教区民全体がその教会台帳と学籍簿によって管理されると同時に《外的体制》(教会・学校施設の管理・維持)、《内的体制》(教会・学校内部の秩序)および《内面的体制》(信仰態度)全体が監督され、教区全体が公的「団体」化していく19世紀10年代において、社会的紀律化は教区民の《私的生活圏》のみならず、また私領主パトロン教区における権威像の変革にもおよんでいた。社会的紀律化が教区民の意識の変革およびその行動様式の規制に文字どおりの実効をおさめるためには教区自体がその構造と機能において社会的紀律化に適合的な形で、意識においても現実においても体制化されていることが条件となる、これが以上の考察からえた結論であった。

#### 註

未刊行文書略号

Geheimes Staatsarchiv der Stiftung Preußischer Kulturbesitz in Berlin—Dahlem:  
GStAPK, X, HA, Rep. 2BII.

刊行史料略号

Max Lehmann(Hrsg.), Preußen und die Katholische Kirche seit 1640. Nach den Acten der  
Geheimen Staatsarchivs, Teil. 1-7(=Publicationen aus den K. Preußischen Staatsar-  
chiven, Bd. 1, 10, 13, 18, 24, 53, 56), Leipzig, 1878—1894.

: MH. GStAPK

Corpus Constitutionum Marchicarum, order Königl. Preuß. und Churfürstl. Branden-  
burgische in der Chur=und Marck Brandenburg, auch incorporirten Landen. . . 1709—1740.

: CCM

Novum Corpus Constitutionum Prussico-Brandenburgensium Praecipue Marchicarum. . .  
1761—1799.

: NCCM

- (1) O. Büsch, *Militärsystem und Sozialleben im alten Preußen*, Berlin, 1962. 阪口修平「軍隊と社会」, 同『プロイセン絶対王政の研究』中央大学出版部, 1988年第3部, 同「社会的規律と軍隊」, 『規律と統合』岩波書店, 1990年, III所収。敬虔主義運動については, G. Oestreich, C. Hinrichs, G. Schmalenberg, W. Stolze, G. Birtsch, H. Lehmann, K. Deppermann, P. Baumbart 等の成果が上梓されているが, 筆者も別の機会にこれを論じる予定である。
- (2) CCM, 1. Theil, 1. Abtheilung, S. 434—443.
- (3) CCM, 1. Theil, 1. Abtheilung, S. 513—522.
- (4) 増井三夫「18世紀プロイセンにおける教育構造の分析(Ⅲ)——特に東プロイセン私領地区域の教育史的研究——」上越教育大学紀要第8巻第1分冊, 1991年, 204頁。
- (5) 田中昭徳は Class を「教区」と訳出している(同『プロイセン民衆教育政策史序説』風間書房, 1969年, 80頁)。本規程の「III. Ein classical-Ordnung」では「教区 Parochie」も使用されており, Class は教区段階の監督区として使用されている(なお条文は註7)。
- (6) 条文は, CCM, 1. Theil, 1. Abtheilung, S. 447—461.
- (7) 条文は, CCM, 1. Theil, 1. Abtheilung, S. 543—546.
- (8) 条文は, CCM, 1. Theil, 1. Abtheilung, S. 551—552.
- (9) 条文は, CCM, Continuatie, Prima. 1737—1740. S. 3f.
- (10) 条文は, NCCM, 3. Bd. S. 931—940.
- (11) 条文は, NCCM, Continuatie Prussico-Brandenburgensium, 5. Bd, S. 67—70.
- (12) 「敬神」は田中訳では「信仰」となっている(田中昭徳前掲書339頁)。なおミンデン学校条令と通則の条文は田中前掲書訳(234—259, 338—364頁)に従う。
- (13) 梅根悟『近代国家と民衆教育——プロイセン民衆教育政策史——』誠文堂新光社, 1967年, 113—114, 116—117頁。「宗教的動機」の内容は「農民とその子弟を敬虔なキリスト者にすること」である(同上113頁)。
- (14) こうした2目的の分化は, カトリック派一般学事通則50条で新たに公布を予告された1765年12月29日付プレスラウ副司教 Strachwitz 教書では次のように述べられている——「両性の青少年は教会並びに学校へ適切に出席し」「神への深い敬愛, 国王への恒常的な忠誠と恭順」を「教え導かれ」, 「神を畏れ, 国王を敬い, 権威に従い, 祖国を愛すること」(ML. GStAPK. 4. Teil, S. 281f.)。
- (15) 「神に対する無際限な信頼という宗教心に見られるこのような特殊に反理性的な内的態度は, ときには悟性による実践的分別に対する無世界的無関心にまで通じ, またしばしば神の摂理に対するあの無条件の心服にも通ずる」, M. ウェーバー『宗教社会学』武藤一雄, 藺田守人, 藺田担訳, 創文社, 1976年, 246頁。
- (16) 「手引き書 小教理問答書 一般の牧師, 説教師のために」『ルター著作集』第1集 第8巻, 聖文社, 1983年, 570頁。
- (17) 「神は父と母とを地上の他のいっさいの人物から区別し, 選びだして, ご自身の次におきたものである。」(『大教理問答書』, 前掲ルター著作集 第1集 第8巻, 410頁), 「この両親の権威から他のすべての権威が出て拡大していく」(同上418頁)。
- (18) 以上の『大教理問答書』からの引用は, 前掲ルター著作集 第1集 第8巻 410—426

頁による。以上の引用の他に、M. Weber のルター派教義から内在的必然性をもって「神への無条件的服従と所与の環境への無条件的適応と同一視するにいたった」鋭利な分析が参照されなければならない (M. ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫版、第2版、1989年、122、125頁)。

- (19) ML. GStAPK. 6. Teil, S. 422f
- (20) ML. GStAPK. 5. Teil, S. 141
- (21) (22) ML. GStAPK. 5. Teil, S. 642
- (23) ML. GStAPK. 5. Teil, S. 644
- (24) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 4532.
- (25) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 4519.
- (26) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 3472.
- (27) 増井「18世紀プロイセン教区の統合化機能——村落学校の規律化機能——」上越教育大学研究紀要第10巻第1号、1990年、25—29頁。
- (28) (29) (30) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 4524.
- (31) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 365. より作成。
- (32) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 3455.
- (33) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 3282.
- (34) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 617.
- (35) 註27に同じ。
- (36) GStAPK. X HA, Rep. 2BII. Nr. 4082.

## Der Raum der Sozialdisziplinierung in Parochien —Die Produktion des öffentlichen Lebenskreises durch die Visitation—

Mitsuo MASUI\*

### RESÜMEE

Die regelmäßige Kirchen- und Schul-Visitation hat den Raum, in welchen Dorfgemeinde die öffentliche Pflicht bewußt sein müssen, aus dem privaten Lebenskreis produziert. Dieser Raum war den öffentlichen Lebenskreis, in welchem die Sozialdisziplinierung funktioniert. In dem öffentlichen Lebenskreis wurden Dorfgemeinde die Denk- und Verhaltensart, die Gott, Landesherr und Obrigkeit Gehorsam leist, gezwungen.

(Inhaltsverzeichnis)

- I. Einleitung
- II. Der Zweck der Sozialdisziplinierung in Parochien
- III. Die Produktion des öffentlichen Lebenskreises durch die Visitation
- IV. Zusammenfassung

---

\* Division of Foundations